

## 胸部外科学会創立の経緯

宮 本 忍

初期の胸部外科学会は肺結核外科を中心としたものであるが、その端緒は昭和19年（1944）7月10日の第1回結核外科懇談会に発している。これより先、5月3日私は東京警察病院の三藤寛氏と相談し、両名が幹事となって奔走した結果、坂口、大槻、都築、前田、岡の諸先生に顧問になっていただき、厚生省の支援を得て市ヶ谷会館において第1回の会合を開くことができた。集まったのは坂本、松倉、中谷、高田（善）、岩原、長堀、ト部、藤田、加納、宮本、水野、桜井、室田の諸氏で、厚生省から浜野・荒木の両氏が参加した。翌昭和20年（1945）1月6日、第3回結核外科懇談会には宮城療養所の富山所長と会田宗太郎氏も参加し、Monaldi 空洞吸引療法と胸廓成形術について研究発表があった。この懇談会は、療養所と大学との間に結核外科の研究と普及において協力体制を作ろうとする意図で開かれたものであり、福田保先生のご尽力に負うところが多い。

戦後、結核問題の社会的重要性に鑑み、内科と外科を問わず研究者の連繫を深めるために結核談話会設立の気運が高まったので、次の趣旨書（昭和22年1月4日付）を各方面に発送した。いわば、この会は戦前の結核外科懇談会の発展的解消を志したものである。

### 結核談話会設立趣旨書

結核は戦争につきものといいますが、とくに敗戦後の栄養状態の悪化は国民の健康をひどく障害し、結核死亡率の激増となって現われています。厚生省の統計によりますと、昭和21年度は死亡者数20万、死亡率は人口1万につき28.4人といわれ、本年度は更にこの数と率を上廻るものと想像されます。しかも結核にかかって倒れるものは日本再建に最も必要な青年諸君であります。しかも現在のように各研究機関、予防並に治療施設がばらばらになってはいるこの破局的な結核の蔓延をくいとめることは不可能であります。それ故結核の行政、研究、治療、予防にたずさわっている私共が総力を結集し、この恐るべき結核と戦わねばならないと思います。幸にも司令部当局もナイト博士を責任者として日本の結核対策に本格的な御世話をいただけると聞き及んでいますのでこの際は私共が同志的な集まりを作って研究や啓蒙に全力を尽すための第一歩をふみ出す絶好の機会と考えます。

去る12月18日は国立東京第一病院に有志のものが集まり会則と会の方針などについて話し合い大体成案をえまして左記に発表し広く同好の士を募りたいと思います。会の主旨に御賛成の方々は進んで御参加をお願い致します。入会は書面又は例会当日会場で受付けます。

第1回例会は1月20日午後1時、神田駿河台日本医師会館、講演者マ司令部公衆衛生部ナイト博士「演題アメリカの結核について」であった。講演終了後同会は正式に発足し、事務所は国立東京療養所内におかれ、その担当者は砂原茂一所長と私であった。発起人は、内科、外科、厚生省関係者計41名であった。

南江堂の「胸部外科」は、昭和23年9月10日、胸部外科学会創立に先駆けて創刊され、その準機関誌としての役割を5年間にわたってはたしたから、それをふくめて学会創立前後の事情を述べよう。

昭和22年（1947）11月28日、大槻先生にお会いし、京大の青柳教授から、胸部外科雑誌を作りたい

いというお手紙をいただいたが、関東では私が中心となってことを運びたいからご指導をお願いしたいと申し出た。この件については、南江堂の勢メ氏とすでに了解済みであった。12月23日、勢メ氏が来訪され「胸部外科」創刊計画が進捗中であり、B5版にしたいと報告した。12月25日、青柳教授から胸部外科学会に関する返信があり、雑誌の発刊についてはもちろん賛成であり、監修者として横田浩吉・岩井孝義両教授をすいせんしてこられた。昭和23年(1948)1月11日午後、勢メ氏来訪、「胸部外科」創刊についていろいろ打合せ、B5、66頁(内アート2頁)、定価30円、3000部にする予定であるという。1月16日、午後6後頃から赤坂山王、天下茶屋で雑誌発行の相談会を開いた。出席者は、篠井、ト部、石川、藤田、宮本、小立、相川、勢メの諸氏、雑誌の体裁、組み方などは大体原案通りに決定、4月創刊の予定で編集プランをねった。1月17日、大槻外科医局で河合直次教授にお会いし原稿をたのみ、胸部外科学会についてもお世話をお願いした。河合教授が関西に向向いて、小沢・青柳両教授と学会設立のとりきめをして下さることになった。5月2日、新潟で外科学会が開かれたとき鍋茶屋で最新医学社、塩野義主催で「肺臓外科」の座談会が開かれた。出席者は青柳、篠井、横田、武田、長石、鈴木、河合、ト部、宮本、京大外科側白羽、藤野の両氏であった。この席上、肺外科研究会を結成し、秋に東京で第6回学会を開くことが申し合わされた。

胸部外科の旗印にするように大槻先生からいわれた「胸部外科」誌発刊の趣旨書は次の通りである。

最近におけるわが国の肺結核外科は、胸廓成形術を中心として、飛躍的な発達と普及の過程にあります。しかしながら、これを欧米諸国の水準と比較しますと、約10年の立ちおくれを認めざるをえません。とくに、肺結核外科以外の肺臓外科や心臓外科におきましては、いまだ実験的研究の域を脱しておりません。

講和会議を目前に控え、欧米の学界と学問の交渉が再開しようとしているとき、わが国には、いまだ胸部外科を中心とした学会が作られておらず、しかもこの分野を取扱う専門雑誌が1つもないことは、まことに残念であります。

今回、これらのことを痛感した2~3のものが集まって、胸部外科に関する季刊雑誌の発行を計画いたしました次第であります。御承知のような出版事情のため、新しい月刊雑誌の発刊は許されておりませんので、さしあたり年4回ぐらいの割合で、季刊雑誌(B5版、60~70頁程度のもの)を出したいと考えています。われわれは、アメリカの胸部外科雑誌に負けないものを作りたいのですが、それがためには諸先生方の御援助が絶対に必要です。

なにとぞ、この計画に御賛同下され、御支援をたまわりたく存じます。

昭和23年2月、胸部外科編集委員。

11月3日、第1回胸部外科研究会が福田保教授司会のもとで東大内科講堂で開かれた。午後の議事で胸部外科学会規則が決定し、それにもとづき胸部外科学会が成立し、第1回会長に大槻菊男先生が選ばれた。演題は23、参加者は約250名。

胸部外科学会の先駆をなしたといえる東京結核談話会も、昭和23年1月10日には第12回を数え、お茶の水の東京医科歯科大学講堂で総司令部外科指導員ワーナー・F・パワース中佐の講演「肺結核外科」が行われた。関西では青柳教授のご尽力で同年2月第1回結核外科談話会が京大耳鼻咽喉科教室講堂で開かれた。この会は2月と8月に開かれることになり、第2回から結核外科集談会、第10回から結核外科研究会と改称された。さきに述べた東西の胸部外科研究者が一堂に会した鍋茶屋における座談会は、胸部外科学会創立のきっかけになったものであり、その機会を設けられた青柳安誠先生のご功績は忘れてはならない。  
(日本大学名誉教授)